真山青果の『好色五人女』解釈

――八百屋お七の「匂い」――

丹羽　みさと

はじめに

真山青果は、八百屋お七を主人公とする作品を、三度手掛けた。第一作目は井原西鶴『好色五人女』（貞享三年刊）の現代語訳『元禄巷談』（新潮社　明治四十三年八月[1]）であり、二作目は西鶴作品に加え、他のお七作品からの援用も見られる翻案小説「八百屋お七――好色五人女――」（『婦人公論』中央公論社　昭和四年一、二、四月。以下「婦人公論版」と表記する）である。これは未完に終わったが、青果は再び筆を執り、西鶴お七から離れた独自の展開を見せる新しい戯曲「八百屋お七」（『冨士』昭和八年九、十月[2]）を書き上げた。

すでに、この三作目を軸として、青果がどのような手法で、どのような新しいお七を創出したのか、西鶴の人物描写への傾倒と併せて論じたことがある[3]。ただし、西鶴作品の影響を色濃く残す一、二作目については、省略・改編された部分を指摘し、出版統制の影響を考察するに留まった。

一、二作目を中心とする本論の前提として、改めて『好色五人女』翻刻を取り巻く状況を見ていくと、性的描写への厳しい検閲が続き、長い間、完全な翻刻が出版できなかったことがわかる[4]。例えば、明治二十三年に出版された丸善・武蔵屋叢書閣『好色五人女』は、「又雨のあかり神鳴あらくひゞきしに○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○程なくあけぼのちかく谷中の鐘せハしく」と、お七吉三郎の密会場面が、「○」で置き換えられている。また帝国文庫『西鶴全集　上巻』（博文館　明治二十七年）の「好色五人女」でも、武蔵屋本とほぼ同じ部分が単語単位で「○」に置き換えられている。「首筋に喰つきける」が「○○に○つきける」となっているなど、二人の間に何が行われているのか、明らかにされていなかった。さらに『西鶴文粋　下巻』（春陽堂　明治三十八年）では、お七の新宅の場面以降しか採録されておらず、吉祥寺での出会いと交歓は全く記されていない。また『西鶴全集』（平民書房　明治四十年）でも、新発意との会話の後は翌朝へと時間が推移し、二人の睦言は全面的に削除されている[5]。

このような時代の制約から、明治四十三年の『元禄巷談』発表時点では、『好色五人女』の好色的描写を叙述することはできなかった。

一方、伏せ字や欠字がなく、抄録でもない『好色五人女』全翻刻が出版されるのは、『西鶴全集』（第二期第六　日本古典全集刊行会　昭和二年八月）以降となる。非売品ながら、青果もこれを所有していた。[6] 続いて出版された『西鶴全集』（昭和書院　昭和二年十一月）は、発行直後に発禁処分を受けているが、[7] 序文に「本書所収の西鶴本も二三年前までは兎角日蔭者扱ひでゐたのが、昨今悉く「官許」となつた。無論不完全ではあるが兎も角白昼公然大手を振つて出られるやうになつた」とあり、当局の検閲も以前よりは緩和されたようである。この後も、『新選西鶴全集』（昭和書院　昭和三年）や『西鶴全集　前』（帝国文庫第二十篇　博文館　昭和五年）などの全翻刻版が刊行されている。

婦人公論版第一回目の自筆稿本末尾には、「昭和三年十一月二十七日起稿　十二月二日脱稿（右第一回分）[8]」と執筆時が記されている。[9] ちょうど検閲が緩和され始めた頃であり、時勢に乗じ、再び西鶴作品に取り組んだ青果の姿が浮かび上がる。

本論では、この様な出版状況の変化を踏まえつつ、一、二作目に改めて取り組み、西鶴研究者であるという誇りを持っていた青果の、[10]『好色五人女』巻四に対する解釈を見ていきたい。特に青果が意識的に改編した部分、すなわち性的描写に焦点を当て、彼が西鶴お七の何を好色的だと見なし、何故その考えに至ったのかを検討していきたい。

なお引用文中のルビや傍点は適宜省略し、新字体に改めた。西鶴『好色五人女』のテキストは、特に指摘のない限り、暉峻康隆・東明雅校注訳『井原西鶴集　1』（新編日本古典文学全集66　小学館　平成八年）による。

1　性的描写――カミナリ――

青果は『元禄巷談』の二年前、「性欲描写につきて」という随筆を発表していた。そこには、描写の際に、ある指針を設けていたことが記されている。

若し余にして性欲描写を企てんとする場合ありとせば、余はその最も際どき数行を描くに中心多少の興味と凝り気を有たぬ訳には行くまいと思ふ（中略）男と女、相抱いて寝たと書いて済む場合でも、余は作家として到底この一句に満足する事は出来ない。更に官能的な、更に刺戟的な、更に婉曲にして更に毒性ある文字を使用せざれば満足出来ない。湿める目とか、肌の匂とか、胸の跳りとかを附加へざれば満足出来ない。この時色を描けば襦袢の紅、髪の黒、八ツ口、変り袵、その他必らず顫動数の多い印象的な色彩を喜び択ぶに相違ない　（「性欲描写につきて」『新潮』明治四十一年八月）

青果は、もし性的描写を試みる機会があれば、「官能的」で「刺戟的」な、「婉曲」にして「毒性」のある文字を駆使したいという。検閲対象となっていた『好色五人女』の現代語訳『元禄巷談』

は、まさにその実践例であるといえよう。

同書で、夜更けにお七が吉三郎のもとへと向かい、「相抱いて寝」る最も性的な場面は、次のように記されている。

お七又云ふ。

「俺も長老様が畏い。」

そして二人ながら、俯向いて涙をホロ〳〵零して居た。

雨は又はげしく降りそゝいで、神鳴が轟くやうに鳴り騒いだ。蒼白く射す稲妻は濡れた雨繁吹の中に、硫黄臭い匂を残して過ぎた。

夜が明けた。

お七は母親に引立てられて、庫裡の離屋へ帰された。

『好色五人女』の同じ場面を左に挙げる。

「おれも長老さまはこはし」といふ。何とも、この恋はじめもどかし。

後はふたりながら涙をこぼし、不埒なりしに、又、雨のあがり神鳴あらけなくひびきしに、「これは本にこはや」と、吉三郎にしがみ付きけるにぞ、おのづから、わりなき情ふかく、「ひえわたりたる手足や」と、肌へちかよせしに、お七うらみて申し侍るは、「そなたさまにも、にくからねばこそ、よしなき文給はりながら、かく身をひやせしは誰がさせけるぞ」と、首筋に喰ひつきける。いつとなく、わけもなき首尾して、ぬれ初めしより、袖は互に、かぎりは命と定ける。

程なくあけぼのちかく、谷中の鐘せはしく

比較すると、吉三郎に肌を寄せ、首に食い付き、首尾を遂げるという西鶴の「卑猥」な部分が全て省略され、代わりに雷鳴、稲妻、香りを伴うカミナリの描写が続いている。カミナリについて森山重雄は、「天と地の結婚であり、性愛の結合の象徴である」[11]と述べており、青果も同様の発想に基づき、直接的な性的描写の代わりとして用いたのだろう。しかしながら、『好色五人女』の「面目を現代に髣髴たらし」[12]むることを企図した『元禄巷談』において、カミナリは性的表現の代用として適当なものなのだろうか。以下、これらの観点からカミナリについて見ていきたい。

カミナリは西鶴作品の中でもしばしば見られる表現であり、『好色五人女』巻四の中でも「神鳴あらけなくひびきしに」「虫出しの神鳴ひびき渡り」「きびしく鳴る時は」等と記されている。いずれも雷鳴（聴覚）に注意が払われており、稲妻（視覚）や香り（嗅覚）に関する記述は特に見られない。

このカミナリの音について、岡本隆雄は初恋のときめきや忍び行く際の緊張感といったお七の心情が表わされていると述べる。[13]

また音以外にも、竹野静雄[14]や森耕一[15]、森山重雄[16]などは、カミナリと禁忌の関連から西鶴お七を論じている。特に竹野は『黄素妙論』（曲直瀬道三抄訳　天文二十一年）等を取り上げ、養生書では交合に不適当な日として「雷電」が記されていると指摘している。これは『好色訓蒙図彙』（貞享三年序）などにも見られる

認識であり、寺院内の交合と併せて、お七の恋には「仏教的禁忌と天忌とが二重に効いて」いるとする。

この他、カミナリの叙述が見られる西鶴該当作品を列挙すると、以下のようになる。

1「怪我の冬神鳴」『好色一代男』巻二の二（天和二年十月）
2「火神鳴の雲がくれ」『好色一代男』巻四の七（同上）
3「欲捨て高札」『諸艶大鑑』（好色二代男）巻三の二（貞享元年四月）
4「神鳴の病中」『西鶴諸国ばなし』巻二の七（貞享二年一月）
5「夜発の付声」『好色一代女』巻六の三（貞享三年六月）
6「毒手を受け太刀の身」『武道伝来記』巻六の三（貞享四年四月）
7「怪我の冬神鳴」『日本永代蔵』巻二の二（貞享五年一月）
8「廻り遠きは時計細工」『日本永代蔵』巻五の一（同上）
9「表むきは夫婦の中垣」『武家義理物語』巻六の二（貞享五年二月）
10「恋に風有女涼み」『色里三所世帯』巻一の二（貞享五年六月）
11「春の初の松葉山」『本朝桜陰比事』巻一の一（元禄二年一月）
12「長崎の餅柱」『世間胸算用』巻四の四（元禄五年一月）
13「官女のうつり気」『西鶴織留』巻六の一（元禄七年三月）
14「三里違ふた人の心」『西鶴名残の友』巻一の二（元禄十二年四月）

この内、『好色五人女』巻四と近い形でカミナリが用いられた作品は、5の「夜発の付声」（『好色一代女』）と、9の「表むきは夫婦の中垣」（『武家義理物語』）である。

特に似ているのは、9の「表むきは夫婦の中垣」である。「宵より鳴神響き渡」っていた雨の夜、主人格である娘は従者である男の懐にかけ入り、「こはや」としがみつく。[17] 男は煩悩を刺激されるが思い留まり、節度ある関係を続ける。その行動が後に功を奏し、女は高家の寵愛を受ける資格ありとして、豊かな暮らしを送るようになった、という筋である。

カミナリへの恐怖が、男女の性愛のきっかけとなる点で、『好色五人女』のお七吉三郎の状況と重なる。また女の方から男に働きかけるという点でも両者はよく似た構成となっている。ただし、「表むきは夫婦の中垣」では男女の関係が進まず、カミナリの晩に結ばれないという結果が、最終的に娘の栄達と結びついており、不幸な最後を迎えるお七とは逆の結末となっている。西鶴がカミナリの晩の行為を禁忌であると認識していたことは、この相反する二作品からも指摘できる。

5の「夜発の付声」では、町はずれに住む元遣手婆が、うらぶれた我が身を省みて、「夜の雨に人はおそるる神鳴を、哀れをしらば、ここに落ちて我を掴めよかし。惜しからぬは命、今といふ今、浮世にふつ〳〵とあきぬ」[18]（傍線論者、以下同）と語る。落雷に打たれる怖さよりも、誰からも見放された憂鬱な今の気分の方が嫌だという心情が強調されている。この老女の言葉は、お七

が「吉三郎殿にあふべき首尾、今宵ならでは」と思う下心から、「さてもうき世の人、何とて鳴神をおそれけるぞ。捨ててから命、すこしも我はおそろしからず」と、落雷を引き合いに出して、本来の意図を強調する趣向と似通っている。

以上の様に、西鶴はカミナリを以て、禁忌と恐怖心、そして性愛衝動を表しており、青果がカミナリを好色描写として用いたのは、妥当な表現方法であるといえよう。

ただし、『元禄巷談』と異なり、西鶴作品ではカミナリの「匂い」についての言及はない。[19] 14「三里違ふた人の心」は、「神鳴のすかぬ時は、抹香を焼(たき)」[20]として、香を関連付けているが、これは落雷よけの呪いであり、青果作品のようにカミナリ自体が発する「匂い」ではない。

西鶴の俳句にもカミナリと香の付合があるが、同様の連想だろう。

常香盤は一日一夜さ
神鳴も天のまはりやしらすらん
吐圭の車共に月影　（『独吟一日千句』延宝四年四月八日序）[21]

ちなみに常香盤は、『好色五人女』巻四にも現れているが、時間を知らせる鈴の音から、雷鳴と共に聴覚を刺激するものと見なされている。[22] ただし、西鶴自身の連想ではないものの、カミナリの「匂い」が想起されたものもある。

うれいの雨におつる神鳴　鶴（注　井原西鶴）
夕煙ゑんせうくさいわるくさい　雲（注　江雲　葎宿翁）
（『虎渓の橋』延宝六年刊）[23]

「神鳴」に続いて「夕煙ゑんせう」が詠まれているということから、カミナリと「匂い」の組み合わせは、一般に全く乖離した表現というわけではないようである。

とはいえ、西鶴がカミナリの「匂い」に言及してはいないことは確かである。西鶴作品の本質を現代語訳によって表現しようとした青果は、なぜ「硫黄臭い匂」を書き加えたのだろうか。それが「官能的」で「刺激的」な、「婉曲」にして「毒性」のある性的表現に成り得ると思ったのだろうか。その答えを探るためには、『好色五人女』巻四と『元禄巷談』に記された「匂い」について、検討していく必要があるだろう。

2　西鶴の「匂い」

『好色五人女』の中には、様々な香りが漂っている。まず現れるのは、避難先の吉祥寺でお七が見付けた着物の「匂い」である。住職から渡される多くの衣服の中から、お七が一枚の着物に関心を抱いたのは、「黒羽二重の大ふり袖に、梧銀杏のならべ紋、紅うらを山道のすそ取り、わけらしき小袖」と目を惹く仕立てもさることながら、「焼(たき)かけ残りて、お七心にとまり」と、香の「匂い」に誘われてのことであった。そしてお七と同じ年の頃、早世したであろう元の持ち主に思いを馳せ、「哀れにいたましく、あひみぬ人に無常おこりて」鎮魂のための題目を唱える。お七が匂

いを契機に、気持ちを揺るがせている様子がうかがえる。そしてこの直後に、銀色の毛抜きで僅かな棘を抜こうとする繊細な美少年、吉三郎を見て恋心を抱く。

従来の研究では、死者を悼む沈んだ気持ちから、好みの男性を見て心をときめかすまでの感情の流れと振れ幅の大きさから、「変わりやすい乙女心を巧みに可笑しく印象づける[24]」ものとされてきた。青果自身も「野に通り雲でも翳すのを見るやうに、はしやいだり沈んだり決りのない娘の所作をこゝろ可笑しく眺めて居る」母親を登場させており、お七を感情の起伏が激しい少女と見ていた。確かに、この場面はお七の不安定な情緒を描いている。しかし、その始まりは、お七が「匂い」を嗅いだことに端を発しており、それがお七の感情に強く作用する力を持っていることに注意したい。

次にお七が「匂い」を嗅ぐのは、吉三郎の部屋へと忍んで行く途中、新発意に邪魔をされる時である。なお、この直前に新発意が常香盤に「香もりつぎて」佇むが、この香をお七が嗅いだとする一文はない。

お七しらけてはしり寄り、「こなたを抱いて寝にきた」といひければ、新発意笑ひ、「吉三郎さまの事か。おれと今まで跡さして臥しける。その証拠にはこれぞ」と、こぶくめの袖をかざしけるに、白菊などいへる留木のうつり香、「どうもならぬ」と、うちなやみ、その寝間に入るを、新発意声立てて、「はあ、お七さま、よい事を」といひける

脈絡のないお七の行動に、さては吉三郎に会いに来たのだろうと、真の目的を見透かした新発意は、袖に残った吉三郎の移り香をわざとお七に嗅がせる。すると、お七は「どふにもならぬ」と恥も外聞もなく、己の欲望に従い、吉三郎の部屋に入ろうとする。この場面において、お七は間違いなく吉三郎の「匂い」に官能を刺激されており、その衝動が、吉三郎との一夜を過ごすきっかけとなる。

二人の仲が進展した後、再びお七が好色的感情を見せるのは、新しく建て替えられた八百屋の土間で体を休めている「里の子」に対してである。

「心よくありしを、そのままおかせ給へ」と下女のいへるを、聞かぬ顔してちかくよれば、肌につけし兵部卿のかをり、何とやらゆかしくて、笠を取除けみれば、やごとなき脇顔のしめやかに、鬢もそそけざりしを、しばし見とれて、その人の年頃おもひいたして、袖に手をさし入て見るに、浅黄はぶたへの下着、「これは」と、こころをとめしに、吉三郎殿なり。

下女に止められるのも構わず、好奇心から「里の子」に近づいたお七が、いたずらにその肌に触れようとするのは、彼から「兵部卿のかほり」がしたためである。この行動は、粗末な身なりの少年から、よい香りが漂う違和感に興味を覚えたせいもあるだろう。しかしながら、一瞬の芳香に刺激され、「袖に手をさし入れ」て直接肌に触ろうとする積極性を考慮すると、好色的感情が「匂い」によって喚起させられたと捉えることができる。

「里の子」に身をやつした吉三郎は、お七の下男久七にも、いたずらをされそうになる。久七が吉三郎に興味をそそられたのは、前髪のある外見や、あかぎれのない足など目に見える情報によってである。しかしながら久七も、吉三郎の口を吸おうとして、「根深・にんにく喰ひし口中もしれず」と思いとどまるように、嗅覚情報に左右されることがある。吉祥寺に住む吉三郎が、戒律で禁じられたネギやニンニクを摂取しているはずはないが、「里の子」という姿から、久七は日頃の食生活を想像し、不快な「匂い」がするだろうと吉三郎を却ける。これは、視覚情報重視の久七でさえ、嗅覚情報で性欲が増減することを表している。

このように、西鶴の八百屋お七には、しばしば「匂い」が好色的欲望を伴って記される。お七と吉三郎が一夜を過ごすカミナリの場面で、「硫黄臭い匂」という一文を青果が付け加えたのは、『好色五人女』の描写をよく反映した、好色的かつ婉曲な表現方法であるといえよう。

3　青果の「匂い」

『元禄巷談』には、カミナリに付随する「硫黄臭い匂」以外にも、様々な「匂い」が記されている。その「匂い」はどのような感情をもたらしているのだろうか。

まずは、僧侶から渡される黒羽二重の描写に、「何時誰の焚き掛けの残りか、軽い香の匂がホンノリと小袖を揺うて居た」という表現が見える。青果のお七も西鶴同様、「訳もなくその人が悲しくなつて」しまい、感傷的になる。

その後、お七が題目を唱える場面で、新たに「冬の日は匂ひ薄く暮れて、門前の寂しい表町から暮時のざわめきが幽かに〳〵空気を動かして来た」という一文が挿入される。この「匂い」は、寂しい冬の光景を描写したものであるが、早世した人物に同情し、しんみりと思い沈むお七の感情が投影されている。

この他、カミナリの晩に母親や乳母が「線香を焚」く場面が加えられているが、ここにはわずかに、カミナリに対する母親たちの不安を見ることができるのみであり、これは単なるまじないと考えていいだろう。

これらの「匂い」に、好色的なものを見ることはできないが、その後記される「匂い」には、明らかに男女間の情欲が示されている。お七と吉三郎との交歓の場面は、「硫黄臭い匂」を残す稲妻で表現されており、人気の無くなった土間で、お七が少年に接触しようするのは、里の子から漂う「兵部卿らしい焚香の匂ひ」に刺激されてのことである。

『元禄巷談』に記された「匂い」は、お七の感情を動かし、好色性を暗示する。一方で『好色五人女』巻四に描かれつつも、『元禄巷談』に反映されなかった「匂い」もある。それらを探り、青果が「匂い」に何を感知していたのかを、さらに明確にしていきたい。

先に述べたように、『好色五人女』では新発意がお七に、吉三郎の移り香をわざと嗅がせて欲望を煽る場面がある。

青果は、この部分を全て消去し、ここに何をしに来たのか「俺あチヤンと知つてるぞ」と新発意に言わせるのみである。新発意はお七に「何を」と尋ねられても「何んだッて好いや、俺は知つ

て居る」とその内容を具体的には語らない。「云はれるなら云つて御覧。男ならハツキリ云つて御覧」「云はれたツて、私、好いんだけれど」と畳みかけるお七にも具体的に答えることなく新発意は話をそらし、銭とカルタと米饅頭の口止め料を請求して、物語から退場する。

お七が照れ隠しに、「お前と寝に来た」という部分はそのままの表記になっていることを考慮すると、青果は性的な語句でも、単なる冗談で済まされるものには、避ける程の好色性を見出していないことがわかる。翻ると、お七が性的衝動を抑えきれなくなる吉三郎の「匂い」に、青果は避けるに十分な「卑猥」さを読み取ったといえよう。

もうひとつの削除は、田舎の少年に身をやつした吉三郎から想像されるネギとニンニクの「匂い」である。『好色五人女』では、八百屋の土間で寒さに震える吉三郎に、久七が茶碗の湯を与え、若衆に良い年頃だといいながら前髪を弄ぶ場面がある。久七の気をそらす為に、吉三郎は畑仕事しか知らないと答えると、今後は足をさすった上、口を寄せる。久七が思い止まるのは、吉三郎の口臭を想像したためである。この部分を、青果は次のように改めた。

「可哀さうに親々が悪るい。お前幾つになんなさる。」と下男の久七は跼んで用の無い事まで聞いて居た。

「はい、十六になります。」

「ここの嬢様も十六。それにしても百姓には惜しい、華奢な生れだ。これでも家に居ては農仕事をなさるか。」

「馬の手綱を曳いたり、草鞋を作りましたりして。」と小児は顔をかくして暗い隅に小さくなつて居た。

西鶴作品で描かれた、性的対象として吉三郎を見る久七と、その視線から懸命に逃れようとする吉三郎という構図は、子供の体調を気遣う優しい大人と、真摯に答える少年の応対に変化しており、全く様子が異なっている。肉体的な接近によって想像されるネギとニンニクの「匂い」を削除しているのは、徹底して久七から好色性を排除した結果である。

『元禄巷談』の「匂い」を追っていくと、青果が西鶴の「卑猥な文字」を、具体的な性的描写だけでなく、「匂い」に見出していたことがわかる。『好色五人女』の性的描写に対するこのような解釈は、約二十年後の婦人公論版にも反映されている。

雑誌『婦人公論』で、昭和四年一月から四月まで連載された「八百屋お七――好色五人女――」では、第一回の冒頭から「匂い」がお七を刺激する。炬燵でまどろんでいたお七がふっと目を覚ますのは、懸硯箱に置かれた「早咲きの水仙花」の「ほんのりと漂はすやうな忍びやかな香り」が無意識にお七の鼻孔を突いたことによる。嗅覚を刺激され、覚醒したお七が思うのは、「この頃、今までに知らない自分を見る」時があるという自己認識である。具体的には、「おぼろ月夜の小溝（せゝらぎ）の流れ音に、かすかな湯垢のかほりの鼻に来るのをはつきりと感じて、悲しきまでに胸隔（むないた）をせめられ」るという自分の姿である。かすかな光や音、匂いという五感の中から、お七が本能的に胸を締め付けられるのは、「湯

垢のかほり」という裸体に直結する「匂い」となっている。この場面は西鶴の『好色五人女』に拠らず、新たにつけ加えられた一文であり、お七が嗅覚によって感情を刺激される少女であることを、再度強調しようとする青果の意識が垣間見える。

更に、吉三郎の棘を抜く場面でも、青果は新たな「匂い」を漂わせる。

美少年のしなやかな指先は、夕闇にホンノリと白かつた。そして少し胎毛（うぶげ）のある軟かな腕の膚は、お七の腋の下にはさまれます。髪にとめた梅花のかほりは、香（にほ）はしい少年の呼吸と共に、お七の額を掠めて感じます。お七はその瞬間、たゞ体中の血がくるめいて、少年と同じ体に脈うつやうな気がしました。[25]

『元禄巷談』でも、吉三郎の腕は「お七の腋窩に挟まれ」、同時に彼の「熱かい呼吸が娘の額を掠め」る。同じような立ち位置で記されている婦人公論版では、更にお七が自分の髪に飾った梅花の「匂い」と吉三郎の「香ばしい」息を同時に感じる様子が加えられている。重なり合うように立つ二人の距離は、非常に近い。一方、西鶴の『好色五人女』では、「御手をとりて、難儀をたすけ申しける」とのみ記されており、挿絵でもお七の母は、吉三郎の対面に立って棘を抜いている。青果は二人の接触部分を増し、さらに近いからこそ感じられる「匂い」を重ねることで、二人の出会いを印象深い「官能」的な場面として描いている。

さらに婦人公論版では、『元禄巷談』で削除された場面が描かれていることにも注目したい。それは、新発意がお七に吉三郎の「匂い」を嗅がせる場面であり、「後にはホンノリと香含めの留木のかほりが、その辺の空気に漂つてゐます。最う何うにもなりません」と、西鶴のお七同様、吉三郎の「匂い」に欲望を刺激されて衝動的な行動を起こす姿が描かれている。また婦人公論版でも、お七と吉三郎の交歓はカミナリの「匂い」で暗示されているが、直接肌に触れる描写もある。

高窓の障子紙を染めて射しこむ稲妻のひらめきは、雨繁吹（しぶき）にしめつた空気のうちに、薄い焔硝のやうなにほひを漂はします。

「光つた。こはひ……」

途端にお七は思はず、吉三郎の肩先にすがりつきました。若衆のやはらかな頸筋に、娘の歯がさはります。[26]

「卑猥」な文字を徹底して排除した『元禄巷談』では、吉三郎の首にお七の歯が触れるという描写は書き得なかった。典拠に記されているにもかかわらず、『元禄巷談』で頑ななまでに「卑猥の文字」が避けられたのは、先述したように当時『好色五人女』の翻刻は厳しい検閲を受けていたからである。特に好色的描写はその対象となっていた。しかし、婦人公論版執筆時にはその規制も緩み始めており、それが『元禄巷談』よりも直接的な好色描写を可能にしたのだろう。

なお、婦人公論版で唯一消去された「匂い」が、久七に付随するニラとニンニクである。作品冒頭から、お七が香りと緊密な関

係にあることを考慮すると、青果は「匂い」のもたらす官能を、お七にのみ結び付けようとしたことが指摘できる。

4　婦人公論版執筆の背景

青果が、婦人公論版「八百屋お七」を手掛けたのは、検閲が緩和され、『好色五人女』全翻刻が可能となりはじめた時代の機運もあろう。それだけではなく、青果自身の内的動機も、執筆背景にあるのではないだろうか。

婦人公論版第一回目の文末に記された附言には、青果の創作意図が記されている。「読者のうち或は著作を改刪補筆せるものと疑惑する人なしとも限りがたし」と不安を抱きながらも、『元禄巷談』との違いは、「較べ読みたる人の、かならず諾なひ頷かる、事なるべし」と期待し、「題名内容ともに再び故翁の著作を襲ふて新篇の創作を完成せん」として、青果は筆を執った。読者にまたか、と思われるかもしれないという不安を抱きつつも、読めば前作とは全く違う内容であることが理解してもらえるはずだ、と信じている様子がうかがえる。

この附言の背景には、自然主義作家として頭角を現していた明治四十三年に、原稿二重売り事件を再び起こして、文壇を追われた経験が横臥している。また同じ様に糾弾されるかもしれないと危惧しながらも、もう一度青果が西鶴のお七に取り組んだのは、好色的要素を含めた『好色五人女』の表現力や人物描写を十全に伝えたいという欲求が抑えきれなくなったからだろう。というのも、青果は『元禄巷談』以後、婦人公論版までに、西鶴に関する随筆や翻案作品を幾つか発表しているからである。[27]

1　随筆「西鶴の五人女に就て」『新潮』明治四十三年十月
2　随筆「西鶴の女」『新潮』明治四十四年七月
3　随筆「西鶴の輪郭」『新潮』大正元年六月
4　翻案戯曲「西鶴置土産」『婦人公論』大正十二年四月
5　現代語訳「西鶴傑作選集」『婦人倶楽部』大正十四年十月[28]
6　翻案戯曲「小判拾壱両」『演劇新潮』大正十五年五月
7　随筆「西鶴研究」『サンデー毎日』昭和二年四月三日
8　研究「井原西鶴の江戸居時代」『中央公論』昭和四年三月

この頃青果は、戯曲や研究論文へと西鶴研究の成果を反映させ始めていた。特に、婦人公論版「八百屋お七」の連載を一度休んだ三月に、8の「井原西鶴の江戸居時代」を発表していたことは注目に値する。多くの論証を以て、西鶴が貞享三年以来、四、五年間江戸で生活をしていたとするこの新たな説は、研究者の間で物議を醸した。現在ではそれを精査した野間光辰[29]によって否定されているが、伊藤正雄[30]など青果の意見を支持する研究者もいた。

青果はこのような調査や研究を重ねて行く中で、「人間全体の研究者[31]」という西鶴への評価を強めていった。

そもそも青果は、『元禄巷談』発表直前から、近松門左衛門と西鶴を比較し、近松が登場人物の社会的身分や規範などに規定された物語展開をしているのに対し、西鶴は「不可抗的」な「本能

に運命に左右されて、知らず〳〵落ちて行く惨めな人間を書いて居る」という見解を持っていた。[32] 青果自身は明言していないが、この抗いがたい本能として、青果は「匂い」と好色の関係を見出していたのではないだろうか。それを『元禄巷談』執筆時の制約下では、充分に伝えきれなかった。その後悔から改めて筆を執り、「新篇の創作」に挑戦したのが、婦人公論版執筆の動機となっているように思われる。西鶴作品への理解とそれを表現したいという熱意が、二重投稿の「誤解」を受ける恐怖や危惧を越えたのだろう。

おわりに

三作目の戯曲「八百屋お七」の筋立ては紀海音作品に依拠しており、したがって「匂い」と好色性との影響関係もほとんど見られない。カミナリの晩に密会する場面でさえも、「お七、吉三郎、互ひに言ひ募つて向直り、両手をもつて互ひに払ひ合ふ時、渡り廊下の方にピンと鉄錠をあける音聞え、お七の母お庄、遮りとゞむる下女お梅を叱りつゝ出て来る」といったように、もはや「匂い」はない。この戯曲の「匂い」は、お七を感傷的にさせる「おぼろに霞む春の夜の土の匂ひ」であり、黒羽二重に残った「焚きかけの伽羅」である。いずれも、お七の感受性豊かな性格を表しており、そこに好色的な要素を見ることは困難である。

真山青果の八百屋お七作品の内、一作目の『元禄巷談』と二作目の婦人公論版では、お七と吉三郎の交歓が、視覚、聴覚、嗅覚を伴うカミナリの描写で表現されていた。カミナリと好色性は西鶴作品においてもしばしば見られ、両者の関係は西鶴作品から引き継がれたものである。しかし、西鶴のカミナリには「匂い」が伴わない。にもかかわらず、青果が「匂い」を付随させたのは、『好色五人女』巻四で様々な好色的衝動を刺激する重要な要素として「匂い」が用いられているためである。西鶴お七における「匂い」と好色性の関連を見出したのは、真山青果ただ一人である。

このような青果の発見は、時代の要請だったのかも知れない。『好色五人女』の翻刻が相次いで発禁処分となり、好色的なものを忌避せざるを得ない状況が、寧ろ好色的なものに対する青果の感性を研ぎ澄ませたと考えられる。

広嶋進は、暉峻康隆や森銑三、日野龍夫ら先達が、『好色五人女』のお七の恋を「清純」「可憐」などと、「ロマンチックな場面として受容してきた背景」を考察し、好色的表現を極小化した青果の二作品による影響を指摘している。[33] 若き日の暉峻康隆や野間光辰などは青果の研究助手を勤めていたこともあったが、[34]「匂い」の問題は看過している。

青果の発見が顧みられなかったのは、研究著作として発表されたものではなく、また彼が西鶴研究者というよりは小説家・戯曲家として認識されていたためであろう。しかしながら、青果の作品によって、西鶴解釈上の新たな知見が得られたことを踏まえると、小説や戯曲など創作物にも目を配り、作家の着眼点に注目していくことも、研究の発展には必要であることを教えられる。当人は、語彙考証に注力していたが、これら西鶴のエッセンスを抽

出する能力が、西鶴研究者としての真山青果の才能だったのではなかろうか。

注

（1）『元禄巷談』は、以下のようにタイトルを変更して、出版され続ける。
『五人女』新潮社　明治四十三年十月
『西鶴五人女』新潮社　大正六年九月
『五人女』南宋書院　昭和元年十二月

（2）未見（但し『真山青果全集』第四巻　講談社　昭和五十年所収）

（3）拙稿「青果の見た八百屋お七――近世資料受容に関する一考察――」『国語国文』平成十九年五月

（4）現在分かっているだけでも、性的描写を伏せ字（欠字・抄録）で対応した翻刻本は数多く存在する。
『好色五人女』丸善・武蔵屋叢書閣　明治二十三年
『西鶴全集』上巻　帝国文庫第二十三編　博文館　明治二十七年
『西鶴文粋』下巻　春陽堂　明治三十八年
『西鶴全集』校訂　平民書房　明治四十年
『西鶴文集』下巻　有朋堂書店　大正三年
『有朋堂文庫』第三十八　有朋堂書店　大正六年
『西鶴全集　校訂』上巻　共益社出版部　大正十四年
『西鶴全集』中央出版社　昭和元年
『西鶴好色物全釈　三段式』広文堂書店　昭和二年
『好色五人女』岩波文庫　岩波書店　昭和二年
『西鶴撰集』万有文庫　第四巻　潮文閣　昭和三年
『西鶴名作集』日本名著全集江戸文芸之部第二巻　日本名著全集刊行会　昭和四年八月
『国文学大講座』第二十　日本文学社　昭和十年
『現代語訳国文学全集』第二十一巻　非凡閣　昭和十三年
（参照：内務省警保局編『禁止単行本目録』湖北社　昭和五十一年）

（5）『西鶴全集』と発禁については、青木稔弥『西鶴好色本』のことなど――古典の発禁」（『国文学　解釈と教材の研究』平成十四年七月）に詳しい。

（6）学校法人国際学園蔵

（7）大塚奈奈絵「国立国会図書館蔵『発禁図書函号目録』――安寧ノ部・風俗ノ部――」『参考書誌研究』平成二十八年三月

（8）学校法人国際学園蔵

（9）「八百屋お七――好色五人女――　第一回」（『婦人公論』昭和四年一月）の附言には、「昭和二年十二月三日」の日付が記されているが、発表時期を考慮すると、成立は「昭和二年」ではなく原稿に記された「昭和三年」を信用すべきかと思われる。

（10）潁原退蔵「真山氏の西鶴研究」『真山青果全集　月報第4号』講談社　昭和五十年

（11）森山重雄「『好色五人女』研究」『西鶴の研究』新読書社　昭和五十六年

（12）『元禄巷談』の改題本である南宋書院版『五人女』序文。大正十二年十二月に記されたもの。

（13）岡本隆雄「『好色五人女』論――ヒロインの造型をめぐって――」『論集近世文学3　西鶴とその周辺』勉誠社　平成三年

（14）竹野静雄「「好色五人女」の性愛表現」『江古田文学』平成十四年十一月

（15）森耕一「『好色五人女』論序説（上）――物語の構造――」『園田語文』平成二年三月、森耕一「『好色五人女』論序説（中の二）――神話――」『園田語文』平成三年三月

(16) 前掲　森山重雄「『好色五人女』研究」
(17) 新編西鶴全集編集委員会編『新編西鶴全集』第三巻・本文篇　勉誠出版　平成十五年
(18) 暉峻康隆・東明雅校注訳『井原西鶴集1』小学館　平成八年
(19) カミナリの視覚的な要素である稲妻は、「火神鳴の雲がくれ」（『好色一代男』）や「怪我の冬神鳴」（『日本永代蔵』）、「春の初の松葉山」（『本朝桜陰比事』）などの諸作品に登場する。
(20) 新編西鶴全集編集委員会編『新編西鶴全集』第四巻・本文篇　勉誠出版　平成十六年
(21) 新編西鶴全集編集委員会編『新編西鶴全集』第五巻下　勉誠出版　平成十九年
(22) 前掲　森山重雄「『好色五人女』研究」、岡本隆雄「『好色五人女』論――ヒロインの造型をめぐって――」。なお『俳諧類船集』巻二（延宝五年序）の「神鳴」の項目に「香焼」が付されているが、これもカミナリよけの呪いに依拠していよう。
(23) 前掲　『新編西鶴全集』第五巻下
(24) 谷脇理史「五人女の悲恋」『悲恋の古典文学』久保朝孝編　世界思想社　平成九年
(25) 真山青果「八百屋お七――好色五人女――　第二回」『婦人公論』昭和四年二月
(26) 真山青果「八百屋お七――好色五人女――　第三回」『婦人公論』昭和四年四月
(27) この他戯曲「椀屋久兵衛」（『新小説』大正七年一月）、随筆「新吉原常々草に就て」がある。「椀屋久兵衛」は『椀久一世物語』の登場人物を参照したのみであり、深い影響関係はないためリストからは除いた。また「新吉原常々草に就て」は、初出が昭和二年四月『サンデー毎日』とするもの（『真山青果研究』真山青果全集別巻一　講談社　昭和五十三年、昭和女子大学近代文学研究室編発行『近代文学研究叢書』第六十四巻　平成三年ほか）と昭和二、三年頃『朝日新聞』とするもの（『真山青果全集』第十六巻　講談社　昭和五十一年）があるが、『サンデー毎日』『朝日新聞』いずれも該当作品を確認することはできず、初出時期の特定ができなかったため、リストから除いた。
(28) 「西鶴傑作選集」に集められているのは、『好色五人女』巻一、巻三、『西鶴織留』、巻一の三、『萬の文反古』巻二の三の四作である。
(29) 野間光辰「西鶴の晩年と江戸居住時代」『上方』昭和六年八月
(30) 伊藤正雄「西鶴の描いた三都」『近世日本文学管見』伊藤正雄先生論文出版会　昭和三十八年
(31) 真山青果「西鶴の五人女に就て」『新潮』明治四十三年十二月
(32) 真山青果「名文評釈　あるかなきかのとげ」『新潮』明治四十三年七月
(33) 暉峻康隆『西鶴　評論と研究』上　中央公論社　昭和二十三年、同『好色物の世界　西鶴入門（下）』日本放送出版協会　昭和五十四年、森銑三「五人女に詩があるか」『西鶴一家言』河出書房新社　昭和五十年、日野龍夫「世間咄の世界」『日本の説話5　近世』東京美術　昭和五十年
(34) 暉峻康隆「西鶴と現代文学」（『西鶴新論』中央公論社　昭和五十六年）に、真山青果は昭和四、五年ごろから、山口剛と研究を始め、昭和七年から十二年に暉峻が助手となったことが記されている。また暉峻康隆・中島隆対談「西鶴研究と私」（『国文学　解釈と鑑賞』平成五年八月）では、昭和八年ごろから野間光辰も助手となっていたことが記されている。

【附言】学校法人国際学園、国文学研究資料館の方々には、真山青果関係資料に関して御高配いただき、また貴重なご教示を賜りました。心より御礼申し上げます。

（にわみさと　立教大学兼任講師）